

2. 鬼瓦

高橋 香

はじめに

鬼瓦は屋根を飾る瓦の中で最も目立つ瓦である。大棟の両端、降り棟、隅棟の先端を飾り、屋根を風雨から守るという実用的な面とともに、建物全体の構成を印象づける意義のある瓦である。鬼瓦のルーツは古代からはじまり、大きさなど規模から屋根構造を考える判断材料となる。一般的に「鬼瓦」は、蓮華紋、鬼面紋の2種の文様意匠に大別され、そのうち鬼面紋は、「平城宮式」「南都七大寺式」の2タイプに分類される〔毛利光 1980〕。各型式には特徴があるが、鬼瓦の周縁にそって珠文帯を施すタイプは「南都七大寺式」に相当し、九州地方で展開する「大宰府式」鬼瓦も同様に珠文帯をもつ。南都七大寺式の流れを組む鬼瓦が、平安京の時期になるとより鬼面を盛り上がらせ、眉に振りを表現するなど、範から抜き出した後にヘラなどで調整を加え、より立体的な鬼瓦へとようになっていく。ところが、10世紀代にはいと、とたんに口の上唇がさがり、迫力にかけたユーモラスな顔になっていくという変化がよみとれる。今まで天を威嚇するようないかつい表情であったのが、とたんにだらけた表情へと変化することが全国的にみられる傾向である。

相模国内において、瓦を使用する建物が10世紀代以降減少傾向となり、瓦の使用が認められるのは永福寺の建立前後からで、鎌倉を中心に相模国内各所で瓦葺き建物が展開する。軒瓦の文様意匠の展開については相模国内を概観している報告はあるが、鬼瓦についてはこれまでになかった〔小林・高橋 2019〕。ここでは、相模国内にみられる鬼瓦を紹介した後、そのルーツはどこにあるのか、また東国内に展開していく鬼瓦についても若干ふれることとする。

1. 満願寺遺跡の鬼瓦について

満願寺遺跡で出土している鬼瓦は、範によるものではなく手づくりによる製作である（第41図）。事実記載でも述べているが、粘土板を数枚重ね合わせて鬼瓦の本体を成形し、珠文帯は沈線で区画を施した後、円筒状の工具を押印して珠文をつくる。粘土板の厚みは5.5cmである。珠文径の直径はおおよそ3.4cmで、周縁にそって押印していたのだろう。眼の表現も円筒状の工具による押印で表現され、眼の上半は眉毛状に粘土凸帯を貼り付け、ナデにより成形している。その盛り上がった部分に沈線でむかって左眉部分に11条、右眉部分にも11条の線が描かれている。固定装置は背面に把手が付くタイプで、若干背面をくぼませ、把手状に粘土板をはりつけ、ここに紐などをくくりつけて固定する。胎土は精良で白色粒子を含み、やや白色がかったあまい焼成である胎土のものとやや暗褐色に焼成された胎土のやや粗いものの2種があるようだ。珠文帯の状況から、125は範による型づくりの可能性が考えられる。このことから手づくりによる鬼瓦と範型による鬼瓦の2種が少なくとも存在していると考えてよいだろう。

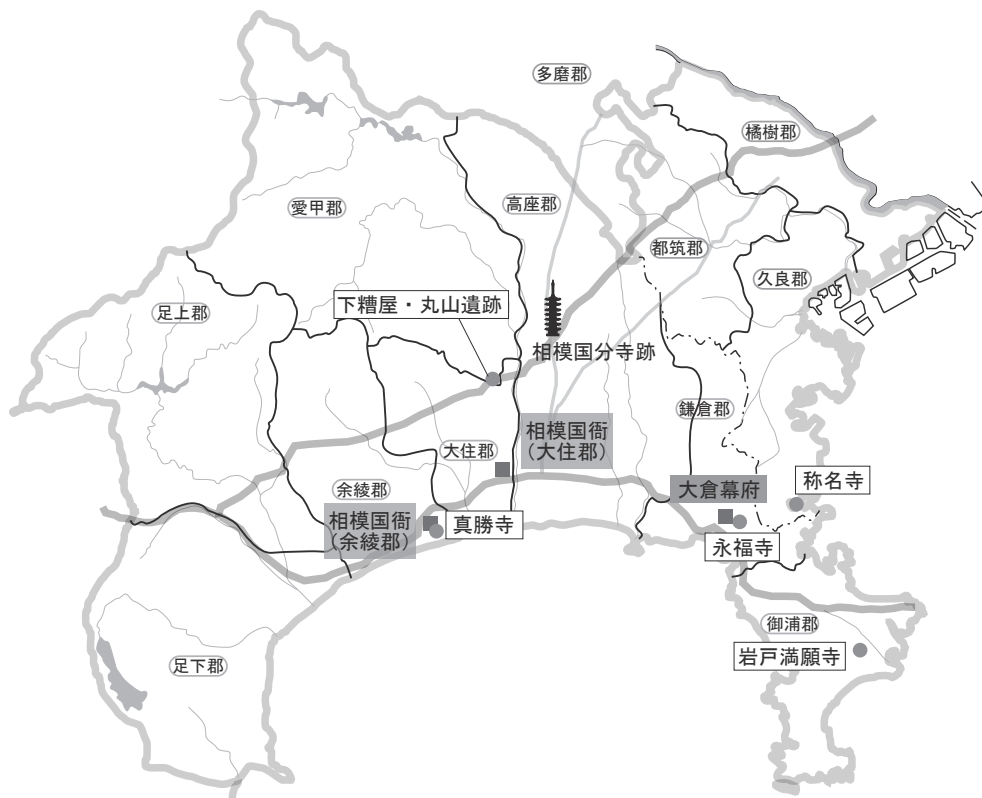
では、鬼瓦の製作時期はいつぐらいであろうか。製作技法からいえることとして、範による型作りから手づくりに変化する時期が、おおよそ鎌倉時代前半頃との見解がある〔山本 1998〕。転換期として挙げられる事例として、法隆寺夢殿の再建期鬼瓦で仁平2（1152）年または永萬元（1165）年に作られたとされる鬼瓦は範による型づくりだが、法隆寺大湯屋の瓦は手づくりである。大湯屋の瓦は平安時代と考えられているが、法隆寺東院の南門付近から出土している鎌倉時代前半と考えられる鬼瓦は手づくりである。平安時代末から鎌倉時代前半頃、範による製作から手づくりへの変化をみることができ、鎌倉時代後期になると完全な手づくりとなり、より立体的な鬼瓦が出現するのである。

2. 県内の鬼瓦について～永福寺鬼瓦との比較～

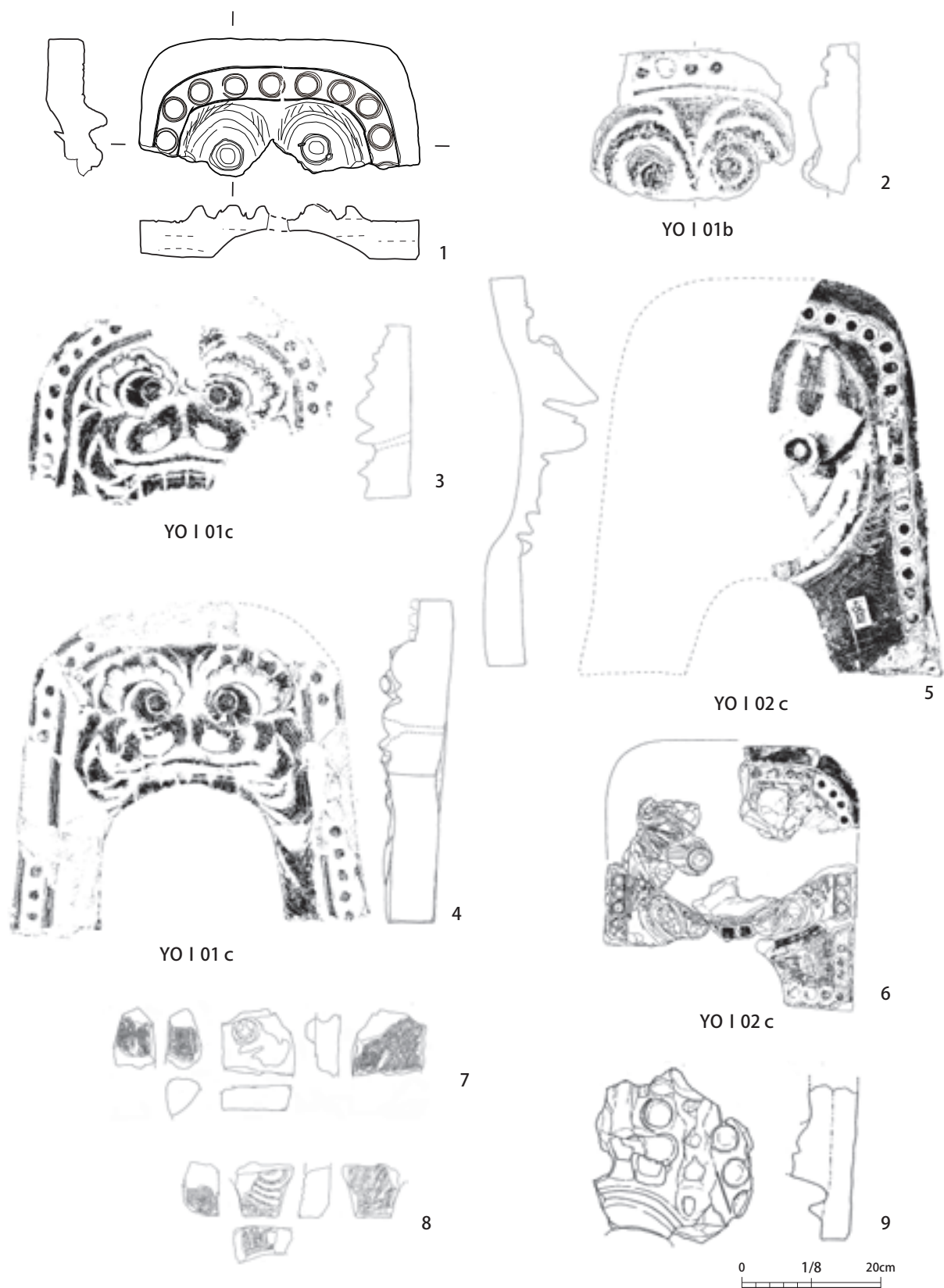
次に、神奈川県内で確認されている鬼瓦の類例について4事例について述べる（第49図）。

永福寺跡（鎌倉市） 永福寺は鎌倉市に所在する源頼朝が創建した寺院である。報告書によれば、4型式13種の鬼瓦片が出土している〔原2002〕。胎土が良土質なもの（YOⅠ類）と粗悪なもの（YOⅡ類）があるとし、範のつくりによるもの（01）と部分的に範を用いた手づくりのもの（02）として分類し、特大、大、中、小があるとした。屋根構造の部位によって作り分けられたと考えられ、製作地としてYOⅠ01、02は鬼面文の作りが異なるが、良質な胎土であることからⅠ期主要瓦、Ⅱ期水殿瓦跡の出土事例と類似するとし、ともに同じ生産地を想定している。YOⅠ01は第49図3・4に図示しているもので、範による製作、眉の部分をはで調整し、眼の部分を引きたつように放射状に調整している。固定装置は釘穴によるものだろうか、鼻の孔が貫通している。挟り部分に歯が表現されていることから軒丸瓦を咬むような表情で、牙は上を向き、巻髪表現が脚部分に凸状に施される。葺き脚部分が高いのは、大棟などの熨斗となる平瓦を多く積む部位に葺いたものと考えられる。02は、範の手づくりとして分類され、満願寺遺跡と同様、珠文帯の珠文は円形のスタンプ状のものを押印し、巻髪は沈線で表現されている（第49図5・6）。裏面もくぼませていることから把手などがとりつく形状と想定される。形状から、YOⅠ02cは降棟や隅棟用に相当する。手づくりで作成された鬼瓦の脚部分に「守光」「文長」の2種3型式のスタンプが押印がされており、平・丸瓦ともに押印されているスタンプと共通することから、瓦工場の生産体制を解明するヒントとなる⁽¹⁾。

下糟屋・丸山遺跡（第6地点）（伊勢原市） 下糟屋・丸山遺跡は、伊勢原市に所在する遺跡で中世城郭と考えられている丸山城である。堀とした遺構から鬼瓦2片、中世遺構外から1片が確認されている。堀から出土している鬼瓦片は、半円状に凸出した部位があるが、これが珠文帯に相当するののか眼に相当するののか不明である。報告では「円形の押し付け」とあることから手づくりの部類にはいる。遺構外か



第48図 相模国鬼瓦出土遺跡



1. 満願寺遺跡 2~6. 永福寺跡 7・8. 下糟屋・丸山遺跡 9. 真勝寺

第 49 図 相模国の鬼瓦

ら出土したとする鬼瓦は葺き脚の右側部が残存するもので、表面、側面はヘラナデにより調整されており、表面はヘラ状工具によって同心円を描いている。沈線はかなり深めにかかれており、髭を巻き上げた表現をする部分と考えられる、とある。しかし、この脚部分に巻きひげを表現するのは古代に多い表現で、中世では永福寺、法隆寺の大湯屋の大棟みられるものの少ない傾向にある。

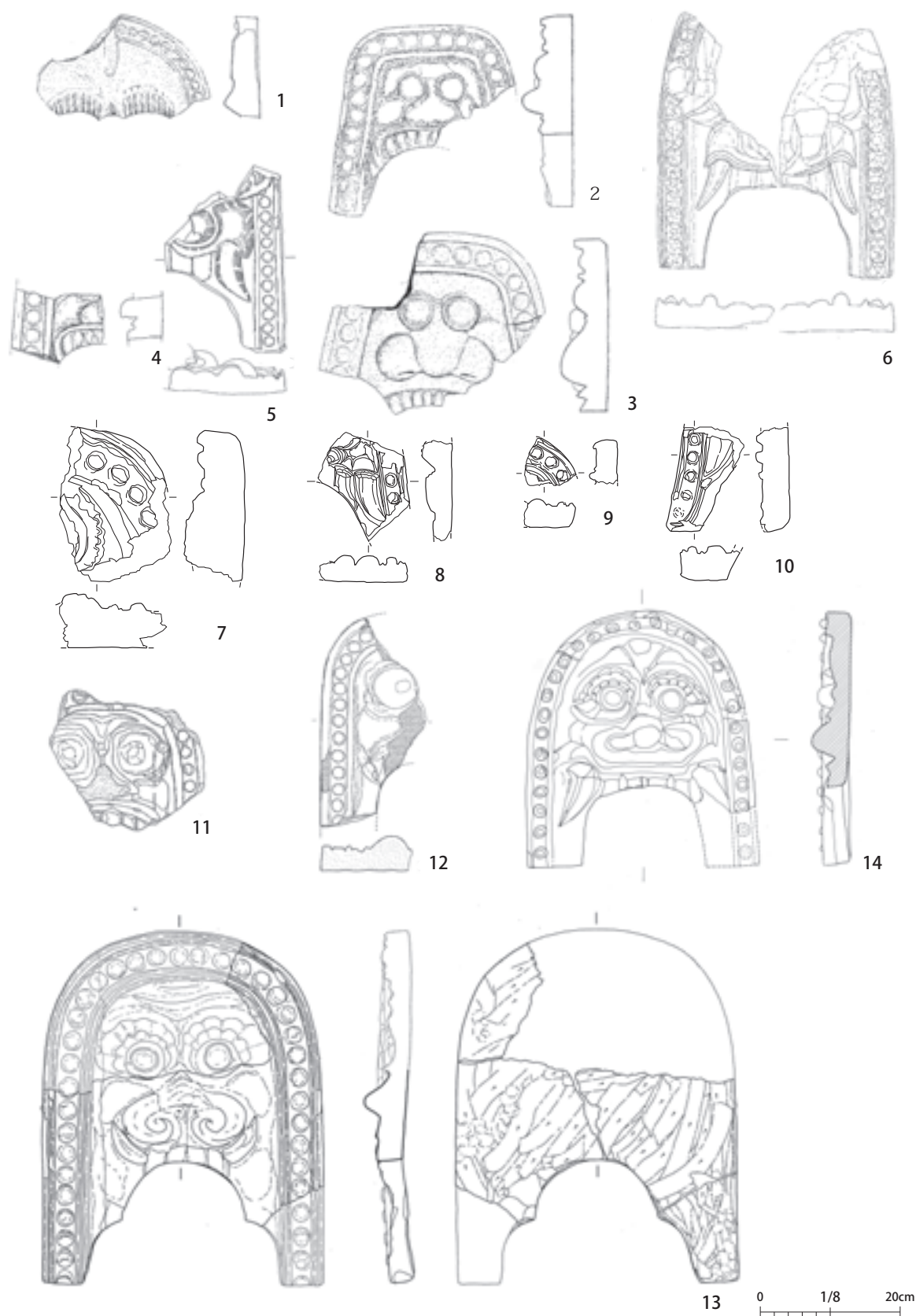
真勝寺（大磯町） 真勝寺は、大磯町に所在する行基創建といわれる寺院で、12世紀以降は六所神社の別当寺となったとされる⁽²⁾。治承4（1180）年富士川合戦の帰途に源頼朝が論功行賞を行った地とされている。中世瓦は採集瓦であるが、数点確認されており、軒平瓦は陽刻上向き剣頭文、軒丸瓦は左回り、右回りとある。鬼瓦は、珠文帯と鬼面が若干残り、珠文と眼、鼻の部分が残存する資料である。珠文は円形の工具を押印する手づくりによる成形である。

史跡称名寺境内（横浜市） 史跡称名寺は横浜市に所在する、鎌倉後期に創立された真言律宗系の寺院で、金沢北条氏の菩提寺である。13世紀後半～14世紀前半の永福寺Ⅲ期の時期の瓦の特徴に類似し、鬼瓦片は1点確認されている。珠文帯部分の珠文が2か所残存するもので、沈線などの区画があるかは小片の為不明である。厚さは2.3cmとやや薄手の手づくりである。胎土は微妙な砂粒を含み、色調は灰白色である。1点のみの出土であるため判断しかねるが、円形の工具を押印した可能性が高いだろう。

3. 満願寺遺跡の鬼瓦のルーツは～相模国の鬼瓦のルーツは～

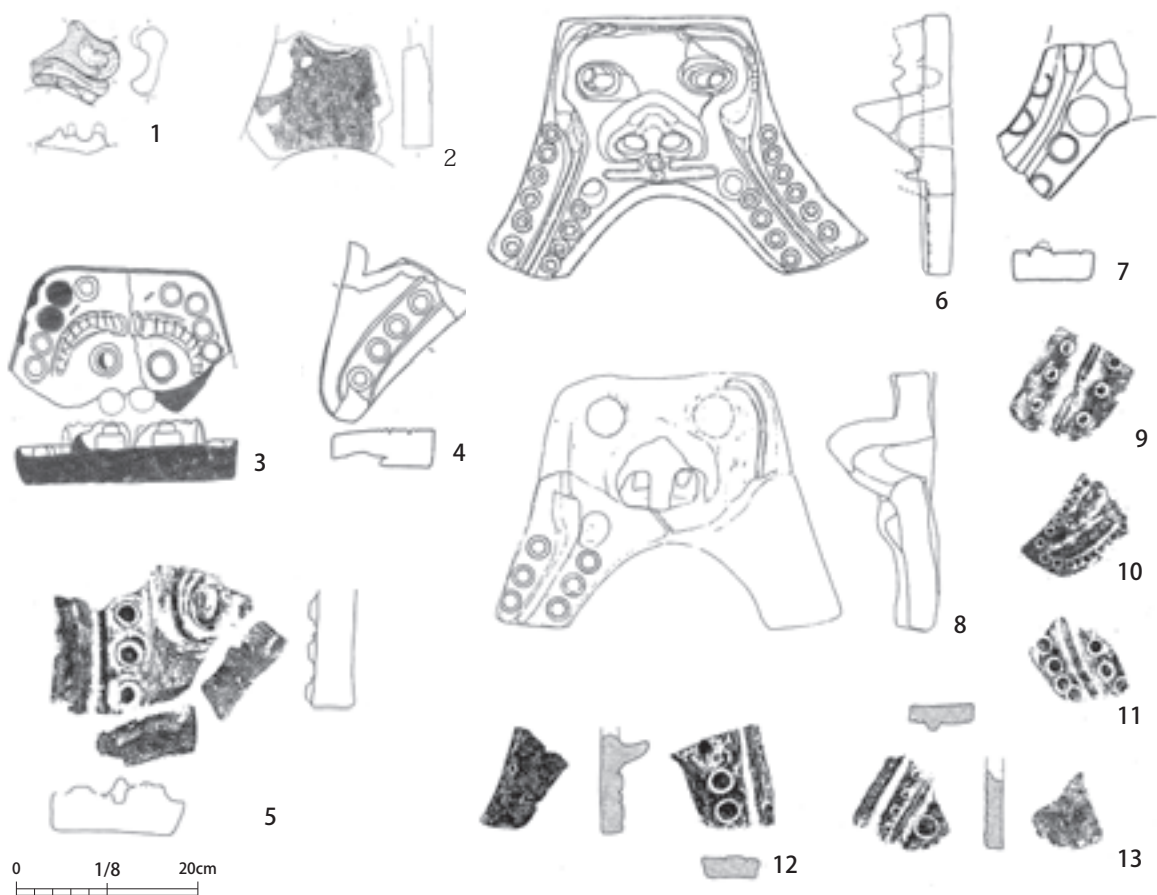
満願寺遺跡から出土している鬼瓦は、①珠文帯をみると押印していること、②固定装置が把手のタイプの鬼瓦であることから、永福寺でみられる範による鬼瓦より若干新しい要素が含まれている。となると、相模で最初に導入された鬼瓦は永福寺の鬼瓦であるが、このモデルとなった鬼瓦はどこ資料であろうか。院政期以降、瓦が使用される建物や生産地が限定的になるため、参考になる地域が限られてくる。その中で、構成要素、眼の表現などを参考にすると、鳥羽離宮跡の金剛心院跡の鬼瓦があげられる。

鳥羽離宮は、応徳3（1086）年の中頃、白河天皇による院政が開始される直前に着手され、白河天皇、鳥羽天皇によって約70年間継続された離宮である。院政期の鬼瓦は、範により製作された鬼瓦で、珠文帯は界線も沈線ではなく凸線で表現され、眼や眉、ほほ、鼻の部分が全体的に突出している。鳥羽離宮の瓦生産は、鳥羽離宮南殿及び東殿は播磨、尾張（東殿のみ）が担い、11世紀後半から12世紀後半まで供給されたと推定されている。金剛心院から出土している鬼瓦の生産地は播磨であり〔上村ほか2017〕、確実な同範の鬼瓦は確認されていないが、林崎三本松瓦窯、神出窯から鬼瓦が出土している。金剛心院も林崎三本松瓦窯の生産地出土の鬼瓦も範による製作で、特に林崎三本松瓦窯から出土している鬼瓦の特徴が永福寺跡出土鬼瓦に類似している（第50図13）。主観的な判断にはなるが、突出する眼と眼の周辺を範の抜き取り後にヘラ状の工具等をもちいて内側から外側へ放射状に調整している様は近いのではないだろうか。また、牙の向きも他の鬼瓦は下向きが多い中、上向きであるところも、林崎三本松瓦窯で作成された鬼瓦を鳥羽離宮でみて永福寺所用瓦にイメージしたのではないだろうか。ただ、葺き脚部分の形状が異なっており、これは屋根構造の違いの相違であると考えられる。満願寺遺跡の鬼瓦は、永福寺より多少遅れて製作にはいったものと考えられるが、同様に鳥羽離宮跡などにみられる鬼瓦の特徴とはまた異なる。眉部分に肉付けさせて沈線を施す意匠は、播磨にも尾張にもみられない。八事裏山瓦窯の瓦の供給があることから、尾張方面からのモデルを探してみたが、該当しそうな個体は残念ながらみられない。隣国である伊豆や駿河方面を概観しても、同様な事例をみつけることはできなかった。駿河では天神洞遺跡から鬼瓦の出土事例があるが、範づくりの鬼瓦で、陶器質の焼成とあることから尾張方面を産地とする鬼瓦の可能性が高い〔池谷2019〕。むしろ、永福寺跡で出土している手づくりの鬼瓦に沈線による表現がみられることから、永福寺からの影響を考えることも可能ではないだろうか。また、範型の可能性がある鬼瓦のルーツも、残存部位が狭い為、多くを追求することは困難であ



尾張：1～3. 社山古窯 4. 権現山古窯 5. 吉田第2号窯 6. 萱野古窯 駿河：7～10. 天神洞遺跡
三河：11・12. 幸田窯百皿古窯 播磨：13. 林崎三本松瓦窯 14. 鳥羽離宮跡

第50図 播磨国・尾張国・三河国・駿河国の鬼瓦



1・2. 城の内遺跡 3. 岡氷川神社 4. 浅見山Ⅰ遺跡 5. 般若寺 6. 上古寺氷川神社遺跡 7. 慈光寺
8. 伝万福寺跡 9. 青鳥城跡 10・11. 十社神社 12・13. 十三坊廃寺

第 51 図 武蔵国の鬼瓦

る。今後、脚部などの部位が出土することにより屋根構造の判断も可能となる為、資料の増加をまち再検討したい。

やや緩い表情から我々がイメージする荘厳な鬼瓦に近い鬼瓦になるのは、鎌倉時代後期にはいつてからといわれ、鬼瓦製作に関して変化があったと推測されている。瓦範の製作には、官営ないし寺営の工房に属する画工や絵師などが関与しているとされ、その後ろだてがなくなったことで緩い鬼瓦に変化したといわれている [山本 1998]。範の作成には、統制された技術系統のもと製作されたものであったのが、瓦づくり職人の手にうつり、見様見真似でつくようになっていった為、稚拙な表情の鬼瓦が一時展開するのであろう。鎌倉後期になると鬼瓦の表現がより盛り上がり、下顎が表現されるようになる。顔面部を載せる地板がアーチ状から台形に変化し、珠文も大粒になる。鬼瓦はやがて「鬼師」とよばれる鬼瓦専門工人集団による製作となり、より立体的な威厳のある鬼瓦が製作されていく。また、鬼瓦の変化は屋根構造の変化にも起因しているという。8世紀後半頃から棟を高く積む傾向があり、野屋根構造が採用されるとさらに屋根勾配がきつくなり、棟の高さも高くなっていく構造になる。屋根の骨組みの上にさらに材を用い、もう一つ別の屋根を乗せると屋根は全体に高くなり、威圧感がでるような建物となる。よって、隅棟や降棟を二段構成にして、高くなりすぎた棟の高さを通減する構造が編み出された。それによって棟先をとめていた鬼瓦は、上段部分稚児棟に一つ（二ノ鬼）、棟端に一つ（一ノ鬼）、大小の鬼瓦が葺かれる構造となる [山本 1998]。二ノ鬼の出現については、12世紀後半の絵画資料から判断されることから、院政期頃には大小さまざまな鬼瓦があったことがわかり、出土資料の中で大小があるのは理解できるだろう [島田 2007]。

おわりに～古代から中世の鬼瓦～

永福寺に導入された鬼瓦は、やがて東国にも展開していく。県内の事例については先に述べたが、永福寺で採用された軒瓦の生産や流通と同様に北武蔵を中心に鬼瓦がみられ、「比企型瓦」と呼ばれる陽刻上向剣頭文軒平瓦に伴って分布する〔石川 2019〕。鬼瓦は、鬼面が簡略化されたとてもかわいらしい表情で、珠文帯は円形状の工具を押印するもので、全体を巡らすのではなく脚部分のみ押印する。眼や鼻は手づくりで粘土を貼り付けて成形している。固定装置は不明であるが、鼻の孔部分が貫通していることからここから固定していたのであろう。近年の成果として、城の内遺跡から永福寺の鬼瓦 Y00 I 01 式が出土しており〔石川 2022〕、鼻と上歯部分の個体がみられる。この資料の他、表面が無文の鬼瓦も出土している。城の内遺跡では永福寺Ⅰ期の軒丸瓦、平・丸瓦がセットで確認でき、武蔵国内では最多の出土量をほこる。これまでに、水殿瓦窯が永福寺の生産窯として周知されているが、城の内遺跡の成果により、児玉地域で永福寺Ⅱ期の瓦生産のみならず永福寺Ⅰ期から永福寺にむけての瓦生産体制が担われていたことが考えられている。

比企型軒平瓦と共伴とするユーモラスな鬼瓦の意匠であるが、挟り部分に軒丸瓦がおさまるような円形ではなく、やや幅広の楕円状を呈し、一見屋根のおさまりが悪そうにもみえる。形状から主観的ではあるが、尾張の濁池北古窯で出土している鬼瓦に類似するようにみえる。脚部分が長く、珠文帯が濁池北事例は周縁に沿って珠文が巡り、上歯が脚部に少しかかるところまで表現されている。この歯の部分を珠文と捉え脚の部分まで押印してしまった、のかは定かではないが、一見みて近い表現であることはあげておきたい。これらの鬼瓦は小型と中型の鬼瓦があり、おそらく二の鬼等に相当する鬼瓦であると考えられる。

装飾華麗であった鬼瓦も、一見眼を疑うようなデフォルメされた鬼瓦に変化する⁽³⁾。その変化が鬼瓦の範製作を担っていたコーディネーターがいなくなり、作業工程に変化が現れ、瓦工人が見様見真似で製作した世界であったのだろうか。鎌倉時代前期は、運慶や快慶を生み出した彫刻史上一大画期であった時代であったにもかかわらず、鬼瓦を「稚児鬼」と呼ぶようにこれまでとは異なりユーモラスな鬼瓦が全国的に展開する。山本忠尚氏は「鬼瓦の暗黒時代」と呼んでいるが〔山本 1998〕、その後「鬼師」の出現により鬼瓦専門工人が成立し、立体的な鬼瓦へと形状を変化させる。満願寺遺跡の鬼瓦は、まさにその過渡期の作品であり、「瓦師」がオーダー発注者である壇越の意見を聞きながら、試行錯誤した結果の鬼瓦であったと考えたい。

【註】

- (1) スタンプ「文長」は2種ある。長方形の押印で印長 6.2cm、印幅 3.3cmのもの、縦の短い長方形で、印長 4.2cm、印幅 2.7cmで「長」の画数を両社区した扁平な字体が特徴的としている。鬼瓦に押印されたスタンプは、軒丸瓦、丸瓦にも同じものが押印されている。
- (2) 竹澤氏編集の「神奈川の中世瓦集成図録」には軒瓦、平、丸瓦は掲載されているが鬼瓦は非掲載である。鬼瓦は現在、大磯町教育委員会に所蔵されている。資料掲載にあたり、大磯町郷土資料館國見氏にご尽力いただいた。
- (3) 例えば武蔵国内だと、武蔵国分寺は平城宮式の正統派の鬼瓦であるのに対し、10世紀代になると中堀遺跡や大寺廃寺ではデフォルメされた鬼瓦が出現する。高橋 2022「関東の鬼瓦」参照。

【参考文献】

愛知県 2016『愛知県史 通史編1 原始・古代』

明石市文化・スポーツ部文化振興課 2017『林崎三本松瓦窯跡群 発掘調査報告書』明石市文化財調査報告書 第6冊

池谷初恵 2019「伊豆・駿河・遠江」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会

石川安司 2019「北武蔵」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会

石川安司 2022「武蔵の永福寺式瓦 - 軒瓦と平・丸から -」『永福寺式軒瓦の成立と展開～瓦から探る中世寺院造営の背景～』第 11 回中世瓦研究会シンポジウム 中世瓦研究会

岩戸晶子 2000「奈良時代の鬼面文鬼瓦 - 瓦葺技術からみた平城宮式鬼瓦・南都七大寺式鬼瓦の変遷」『史林』第 84 巻 3 号 史学研究会

上村和直ほか 2017『平成 28 年度京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書 鳥羽離宮金剛心院出土品』京都市文化財研究所

神奈川県立歴史博物館 2022『源頼朝が愛した幻の大寺院 永福寺と鎌倉御家人 - 荘厳される鎌倉幕府とそのひろがり -』鎌倉市教育委員会 2002『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 国指定史跡永福寺跡環境整備事業に係る発掘調査報告書 - 遺物編・考察編 -』

桐山秀穂 2019「尾張・三河」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会

神戸市教育委員会 2018『神出窯跡群発掘調査報告書』

小林康幸・高橋香 2019「相模」『中世瓦の考古学』中世瓦研究会

財団法人かながわ考古学財団 2010『下糟屋・丸山遺跡（第 6 地点）』伊勢原市都市計画成瀬第二特定土地区画整理事業に伴う発掘調査 かながわ考古学財団調査報告 260

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002『鳥羽離宮跡 I 金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 20 冊

島田敏男 2009「10 降隅棟鬼瓦の①と納まり」『平城宮第一次大極殿の復元に関する研究 4 瓦・屋根』奈良文化財研究所学報第 80 冊 奈良文化財研究所

高橋香 2022「関東地方の鬼瓦」『鷗尾・鬼瓦の展開Ⅱ - 鬼瓦』第 21 回シンポジウム 奈良文化財研究所

竹中大工道具館 2017『千年の葺 古代瓦を葺く』

中世瓦研究会 2022『永福寺式軒瓦の成立と展開～瓦から探る中世寺院造営の背景～』第 11 回中世瓦研究会シンポジウム

永井邦仁 2014「愛知県における中世瓦の展開とその特徴」『研究紀要』第 15 号 愛知県埋蔵文化財センター

中三川昇 2015「三浦半島東岸中部の古代末～中世初期遺跡群について - 三浦氏本貫地とその周辺における遺跡群の諸相 -」『考古論叢 神奈河』神奈川県考古学会

奈良文化財研究所 2021『鬼神乱舞 - 護る・祓う・鬼瓦の世界 -』

奈良文化財研究所 2022『鷗尾・鬼瓦の展開Ⅱ - 鬼瓦』第 21 回シンポジウム 奈良文化財研究所

原廣志 2002「第 4 章 出土瓦について」『鎌倉市二階堂国指定史跡 永福寺跡 環境整備事業に係る発掘調査報告書 - 置物編・考察編 -』鎌倉市教育委員会

前田清彦 2022「東海地方の鬼瓦」『鷗尾・鬼瓦の展開Ⅱ - 鬼瓦』第 21 回シンポジウム 奈良文化財研究所

毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦 - 八世紀を中心にして」『研究論集』Ⅵ 奈良文化財研究所

横浜市教育委員会 2003『史跡称名寺境内旧伽藍跡確認調査報告書 - 平成 12・13 年度史跡称名寺境内旧伽藍跡確認調査に伴う埋蔵文化財調査報告 -』

山本忠尚 1998『日本の美術 鬼瓦』No.391 至文堂

【図版出典】

第 48 図 筆者作成

第 49 図 鎌倉市 2002、公財かながわ 2010、横浜市 2003 引用作成

第 50 図 桐山 2019 池谷 2019 上村ほか 2017 明石市 2017 引用作成

第 51 図 石川 2019.2022 桐山 2019 引用作成